

救急医療部門における家族の悲嘆と死別体験～突然に大切な人の死に直面する家族の体験を理解する

伊東由康¹, 椿美智博^{2,3}, 小林幹紘⁴ ¹兵庫県立大学看護学部, ²北里大学看護学部, ³武蔵野大学看護学部



研究の背景と目的

救急医療部門で亡くなる患者の家族は、予期せず大切な人との死別を体験することが多く、死別に伴う衝撃や苦痛が強く、健康を損なう可能性が非常に高いことが知られています。そのため、救急医療部門の医師や看護師といった医療従事者には家族を支えるための関わりが求められています。しかし、救急医療部門において家族が体験する死別と悲嘆とはどのような体験であるのか十分には理解されていません。そこで、本研究では、救急医療部門における家族の悲嘆と死別体験について探求し、家族の体験についての理解を深めることを目的としました。

研究の結果

これまでの研究を検索したところ982件の文献が特定されました。これらの文献を図1に示す手順で選定を行ったところ、選定基準を満たした文献は20件でした。これら20件の文献の多くは、米国で実施された家族に対するインタビューに関する研究であり、データの抽出と統合を行ったところ表1に示す6つのテーマが導き出されました。

表1 救急医療部門における家族の悲嘆と死別体験に関する6つのテーマ

テーマ	説明
情報の不足	家族は何が起きているのか医療従事者が教えてくれず、説明してくれず、患者が治療を受けている間、情報不足による不満や動揺を感じながら過ごすことを体験していました。
突然の悪い知らせ	患者に何が起きているのかも分からないなか、家族は突然に患者の死という悪い知らせを告げられることを体験していました。
蘇生場面への立ち会い	多くの家族は患者の傍にいたいという思いを抱く体験をし、患者の蘇生場面に立ち会うという選択肢を与えてもらうことを強く支持していました。
混沌とした環境	家族はプライバシーのない環境で、慌ただしく動き回る人々に囲まれて過ごすことを体験し、患者とのお別れのためプライベートで静かな場所を必要としていました。
死別に伴う心理社会的反応	家族は死別に伴い、見捨てられ感や怒り、悲しみ等のさまざまな心理的反応を体験し、特に、罪悪感を生じることがもっとも共通した体験でした。
医療従事者によるサポートとケアへのニーズ	家族は、医療従事者からのサポートやケアが不足していることを体験しており、医療従事者による死別後のフォローアップを望んでいました。

研究の結論

これら家族の体験を表す6つのテーマは、医師・看護師等の医療従事者による家族への不十分な情報提供やプライバシーへの配慮の欠如、死別後のフォローアップの機会の不足など、解決すべき課題を示すものです。特に、家族とのコミュニケーション不足がこれらの課題の背景に存在しており、多忙で混沌とした環境にあるものの、医療従事者には積極的な家族とのコミュニケーションが求められ、家族がどのような体験をしているのか理解したうえでその悲嘆と死別体験を支える支援が望まれます。

研究の方法

研究のデザイン

主要な概念や利用可能なエビデンスを概説する「スコープレビュー」という手法を用いて、「救急医療部門における家族の悲嘆と死別体験について、明らかとなっていることは何か？」を研究疑問にこれまでの研究（文献）を概観しました。

研究の選定

研究疑問に応じた研究を選定するためにMEDLINE・CINAHL・PsycINFO・EMBASEという医学・看護学・心理学系の4つの研究データベースから研究を検索し、救急医療部門での悲嘆と死別をトピックとした研究論文のうち、患者の家族が研究対象であり、英語で執筆された全ての研究を選定しました。

研究データの抽出と統合

選定された研究から研究疑問に対応するデータを抽出し、テーマ分析という手法でデータを統合することで救急医療部門における家族の悲嘆と死別体験を表す主要なテーマを導き出しました。

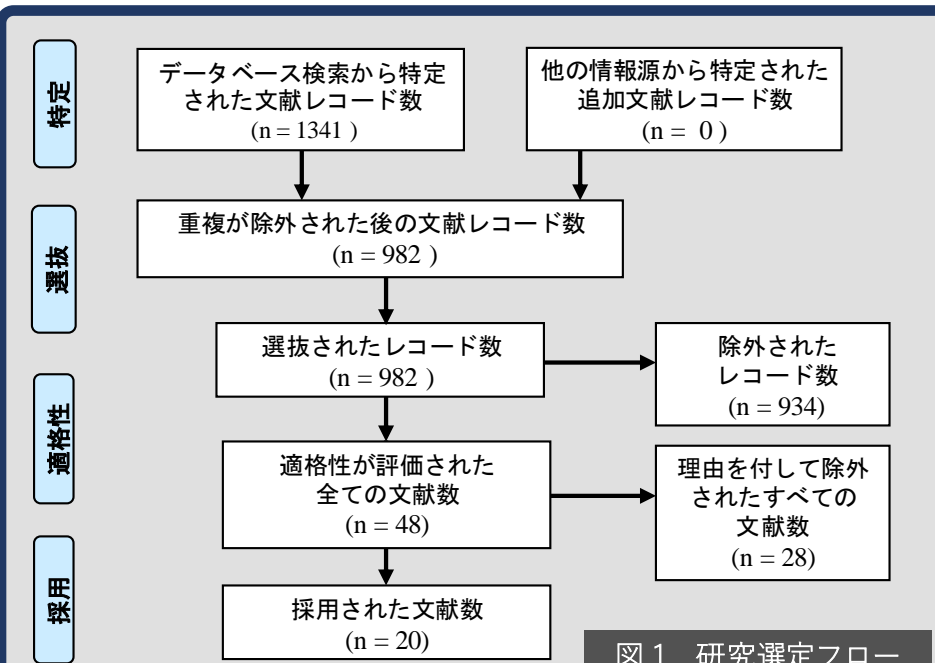


図1 研究選定フロー